

百人町教会

集会案内

礼 拝：毎週日曜 午前10時30分
 於 東京家政専門学校2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
 於 Zoom
 連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈 晶淳 方
 TEL/FAX 03-6273-2930
<http://www.hyakunincho-church.com>
 郵便振替口座：00180-8-565379



私の目線（九七）

一五年目の韓国生活

賈 熙俊

私は二〇二二年夏から韓国ソウルに位置する「HYBE」（ハイブ）というエンターテインメント会社で働いています。この会社は、BTS（防弾少年団）という世界的なアーティストが所属していて、彼らはK-POPブームの先頭に立ち数多くの賞を受賞し、国連総会やホワイトハウスで演説をするなど、アイドルという分野から逸脱したアーティストです。世界に自国の国威宣揚だけではなく、欧米から見た、韓国を始めアジアのイメージに変化をもたらしました。私はそんなアーティストが所属するこの会社でメディアや書類の韓日翻訳および通訳をしています。

なぜ私がこの翻訳という仕事に興味をもったかという、そのルーツは北支区とソウル老会が今でもおこなっている日韓青少年キャンプにあります。そこに参加した学生のうち唯一、日韓両国の言葉を話すことができたため、必然的に参加した学生たちの会話を通訳していました。それを機に通訳の醍醐味を知り興味を持ったのです。まだ誰かに翻訳がなるとるかを語れるほどではありませんが、これまでの経験に基づく翻訳に関する自分なりの考えを少しお話しできたらと思います。

人々や社会の変化と共に、言語、すなわち翻訳・通訳の世界も変わりつつあります。元来の翻訳者第一世代の役割は、正確かつ迅速

な伝達が主でした。しかし近頃、IT革命によるスマートフォンの登場、それに伴い自動翻訳の精度が急激に進化し、一時は翻訳という仕事はなくなると懸念されていました。

しかしそれと同時に、大量の情報媒体、すなわちメディアにより誕生した情報化社会になりました。この変化は言語にも影響をもたらし、流行する若者言葉、新しい単語と死語との入れ替わりが常に起こりました。翻訳者にはローカル化、すなわち現地化が求められました。具体的には、Z世代（一〇代から二〇代の若者をさす言葉）の話し手の発言は全体的に言葉のニュアンスが曖昧で複合的な意味をもっています。例えば「エモすぎてバビった」など、日本語なのかすら疑問に思える言葉が、常に誕生しているのです。

それに合わせた翻訳をするため、もう若者とおじさんの境にいる三三歳の私が、日韓両国の若者に置いていられないよう日々勉強しながら、言語の奥深さを感じている今日このごろです。ちなみに先ほどの例えの意味は「エモい emotional（エモーショナル）バビった（びっくりした）」すなわち「情緒的で驚いた」でした。

追伸・僕が韓国で暮らし始めて早一四年が経ちます。今でもいつも日本に帰りたいと思いつながら過ごしています。今夏、日本に帰ることになりそうです。その時はぜひ皆様にご挨拶に行きたいと思しますので、どうぞお体に気をつけてお過ごしください。

老いの日に

詩編七一・一一二四

賈 晶淳

聖書には孤児や寡婦、貧しい人や寄留者への配慮の言葉は多くありますが、何故か老人のことは殆ど出ていません。老人は知恵の人として尊敬されていたからでしょうか。今の日本社会は高齢化が進み、老人が社会的弱者として認識されることも多いです。幸い教会は老人にとって大変重要な居場所になっています。私自身、六月で六七歳になりました。前期高齢者として立派に老人を名乗れるようになりました。今日は聖書における老人について一緒に考えたいと思います。

今日の聖書、詩編七一編の内容は老人の祈りです。希望を失った時にこの詩を繰り返し読むだけでも大切な祈りになると思います。老人は祈ります。九節です。

老いの日にも見放さず、わたしに力が尽きても捨て去らないでください。

一八節です。

わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を来るべき世代に語り伝えさせてください。

まず、聖書における老人について理解する

のは二千年以上前のことですのでなかなか難しいところですが。ただ、現代の正統派のユダヤ教徒の世界を通じて間接的な理解ができると思います。子どもたちが一八歳になりますと成人として大人の世界に迎え入れられます。そして、結婚が勧められ、仲人を通して相手を選び、直ぐ結婚をするカップルが多いと言われています。このような生き方はローマによるエルサレム破壊以後、約二千年間をディアスポラ（放浪）としての生活を余儀なくされ、さらに第二次世界大戦中はホロコーストというナチによるユダヤ人迫害に遭ったことで存亡の危機感を常に持っているからだと思います。

最近二〇二二年のOECD国家の出生率が発表されましたが、イスラエルが二・九人で断然トップです。聖書の「天の星のように、海辺の砂のように増やす」（創二二の一七他）という神の約束を大事にしているようです。イスラエルの町では若い夫婦が子どもを二、三人連れて歩いている姿を良く見かけます。一八歳とは自立ができていない年齢です。結婚をしても暫くは親に依存せざるを得ません。そのような環境では親の言葉は力を得ます。そして、親は四〇代に孫を得、六〇代に曾孫を得ることになります。即ち、今の自分の年

齢では大勢の孫・曾孫を持つ老人になっているのです。要は私も老いの日について語れるようになったということです。

老いについて考える時に老人を社会的弱者として認める環境になかなか納得が行かないところが多いのではないかと思います。このような理解の裏には疎外の問題があるからだと思います。家庭の中でも老人の居場所がなくなりつつあります。老いとは心と身体が共に弱って行くことで、人との関係も消極的となり、遠慮がちな生活になります。助けが最も必要な時期でもあります。更に居場所までの消失は生活の安定感までなくしてしまいます。その老いの日のために聖書はどのようなメッセージを残しているのでしょうか。

聖書は老いの日の白髪を非常に肯定的に語っています。例えば、箴言一六章三一節です。

白髪は輝く冠、神に従う道に見いだされる。

箴言二〇章二九節です。

力は若者の栄光。白髪は老人の尊厳。

ヨブ記一二章一二節です。

知恵は老いた者と共にあり、分別は長く生きた者と共にあるというが、

聖書の内容をよく見ますと、若者と同時に書かれているのが分かります。要するに、関係性の中で語られているのが特徴です。百人

町教会の週報にこの数年続いている今年の聖句があります。そこにも老人と若者が同時に出ています。ヨエル書三章一節です。

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。

次は詩編七一編の詩人の祈りについて見てみます。先ず、詩人はその生涯に多くの苦難を乗り越えて来たこと、その折々に神に助けがあったことを覚えた上、老いの日における再生を祈っています。二〇節、二二節です。

あなたは多くの災いと苦しみをわたしに思い知らせられました。再び命を得させてくださるでしょう。地の深い淵から再び引き上げてくださるでしょう。ひるがえって、わたしを力づけ、すぐれて大いなるものとしてくださるでしょう。

そして、詩人は死への不安の中で挫折や絶望を囁く存在を認め敵だと表現しています。そして、その混乱から直ちに助けるように神に祈っています。一〇節から一二節です。

敵がわたしのことを話し合い、わたしの命をうかがう者が共に謀り、言っています。「神が彼を捨て去ったら、追い詰めて捕えよう。彼を助ける者はもういない」と。神よ、わたしを遠く離れないでください。わたしの神よ、今すぐわたしをお助けください。

この敵とは外的存在にも見えますが、それよりさらに怖いのは内なる敵だと思います。自分の弱さを気づかせるものとはとても近いところにある訳です。自制心がなくなり、不満が多くなります。神を捨てるようにもなります。

しかし、このような時に詩人はある方法でこの危機を乗り越えて行きます。それは神を讃美することです。讃美は免疫力を高め、混乱という内なる敵を倒します。八節です。(他六節、一四節、二二節、二三節、二四節。)

わたしの口は賛美に満ち、絶えることなくあなたの輝きをたたえます。

また詩人は老いの日にできることを示しています。一七節と一八節です。

わたしの若いときからあなた御自身が常に教えてください。くださるので今に至るまでわたしは驚くべき御業を語り伝えて来ました。わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を来るべき世代に語り伝えさせてください。

若い時から語り伝えて来た神の御業、それを老いて白髪になっても次の世代に語り伝えることができますようにと祈っています。

そして、神の御業と関連して「恵みの御業」という表現が五回出ています。二四節aです。

(他二節、一五節、一六節、一九節。)

わたしの舌は絶えることなく、恵みの御業を歌います。

この箇所もやはり讃美する内容ですが、ただこの『新共同訳』聖書の「恵みの御業」という訳語は、二〇一八年発行の『聖書協会共同訳』聖書では全て「正義」になっています。

言葉のニュアンスは「恵みの御業」が一方的で個人的に読み取れる代わりに、「正義」は双方向的で共同体的に読み取れます。

結論を申しますと、現代社会の焦点は若者に多く充てられています。若者に希望があるから当然かも知れません。しかし、良き社会とは若者も良く見え、老人も良く見える社会でなければならぬと思います。聖書で老いの日に語り伝えようとする「恵みの御業」、即ち「正義」とは若者と老人のどちらかを選ぶ世界ではなく、両者が互いに信頼と尊重を持ち共に生きる世界だと思えます。老いて白髪になった人の祈りと讃美する姿はきつと若者の目にも美しく見えるはずで。

終わりにエレミヤ書三十一章一三節をご紹介します。

そのとき、おとめは喜び祝って踊り、若者も老人も共に踊る。わたしは彼らの嘆きを喜びに変え、彼らを慰め、悲しみに代えて喜び祝わせる。

(二〇二三年五月七日証詞より)

白い紫陽花 ―自己紹介に代えて―

空閑 祐美

早稲田キャンパスの正門近くにある「高田牧舎」というお洒落なレストランが入ったビルの一室で、私たちのゼミや研究会がよく行われていた。空閑厚樹さんとの出会いは二十年前前に遡る。まだ立教大学に就職する前の「空閑さん」は、当時大学院生だった私にとつて、とても親しみやすい先輩だった。

その頃の私は、研究も兼ねて山谷のホスピスに寝泊まりして、死のことばかり見つめていた。空閑さんの主催する生命倫理の研究会に行くと、たいてい開口一番「やあ、ゆみちゃん、新しい彼氏できた?」と、さして興味もないだろうに聞いてくる。今ならセクハラ発言で問題になるようなそんな軽い挨拶に、私はいつもバカ真面目に新たな恋の報告をしていた。空閑さんの彼女のことも聞けば話してくれた。聞きながら、絶対この人とは付き合いたくないと思った。もちろん空閑さんの最初の結婚も祝った。でもなんで私がいるのに別の人を選ぶのかと内心不満だったのが、我ながら可笑しかった。

空閑さんが結婚してからは研究会後の飲み会が開催されることはほぼなくなったが、私が大学院を修了すると非常勤講師の仕事を回

してくれたりと、空閑ゼミの課外活動に誘ってくれたり、時折顔を合わせる間柄だった。

二〇一二年、空閑さんが最初の研究休暇を取る年、私はその代講で新座キャンパスに通っていた。梅雨の息苦しい空気の中、重い身体を引きずって志木駅からの道のりを歩いていくと、キャンパスへの路地に咲く真っ白な紫陽花が心を癒やしてくれた。長女の遊生ゆうを妊娠したと解つたのはそんな季節だった。私は「未婚の母」となったのだった。

ある年、「キリスト教と人権」についての複数の講師で担当する授業に空閑さんが声をかけてくれた。そこで上智大学から出講されていた久保文彦先生に出会った。聖書の物語を通して現代の人権問題に焦点を当てる講義はとても興味深く、私は自分の担当が終わった後も聴講に出かけた。授業後の久保先生と空閑さんとの親睦ランチも楽しみだった。

正直に言うと、私は昔から聖書の逸話が苦手だ。ホスピスやあちこちの教会で講話を聞いたが、どうしても心がひっかかってしまう。「カインとアベル」の話も久保先生が毎年解説されるが、やはり腑に落ちない。私自身、二人姉妹の姉であるが、就職も結婚も七歳下の妹に先を越されてしまい、家族の中にも社

会の中にも居場所がなかった。その上「未婚の母」という日本の社会制度上存在しないことになっている立場になってしまった。最愛の娘との生活はかけがえのないものだけれど、これまでの努力や自分の良心さえ空虚に感じていた。カインの憤りに同情した。

しかし久保先生は、教卓から真っ直ぐ前を見据えて私たちに言った。社会的な充足と正しい信仰をもつことは必ずしも一致しないのだと。それでも「もしお前が正しいのなら、顔を上げればよい」と。おそらく先生は毎年同じように話してくれていたかもしれない。でもその年、その日、初めてその言葉が私の心の奥底に届いた。

そしてその冬が終わる頃、久保先生のご縁をきっかけに、一人暮らしになっていた空閑さんと私は、新たな関係として人生を出発した。私の名前も「空閑さん」になった。

この春、空閑さんは二度目の研究休暇に入った。私たちは週末には埼玉小川町の自宅で、さらにもうひとり増えた家族四人でズーム礼拝を聞いている。遊生の弟となる道生（みちお）が生まれる年、庭の裏木戸の側に白い紫陽花を植えてもらった。二歳になった道生の歩く姿を、今日は紫陽花のつぼみが揺れて見つめている。

百人町教会に支えられて

高瀬 礼子

百人町教会で受洗してから四〇年以上が経つことになる私です。振り返ると信仰心も深まった気がしませんがキリスト教についての知識も身についていません。それもそのはず、ほとんど同じ年数を子どもたちと生活を共にし毎日食えることと遊ぶこと、大いに悩むことでアツという間に四〇年が過ぎていました。「ろばの家応援団」からの支援には経済

的精神的に大変助けられました。百人町教会や応援団に対しては具体的な報告はほとんどしてきませんでしたが、思い返すととても信じられないことばかりです。その代表的なもの、都議会や国に対して、東京養育家庭の会長としてまた全国里親会副会長として参画し「里親制度改革」に大いに貢献できたことです。こどもたちから教えられたり、語

ってくれた子どもの声を私は代弁者として審議会、懇談会あらゆるところで発言してきました。その時の心の支えになったのは「私は百人町教会の会員である」という誇りだけでした。あらゆるピンチの時には必ず同行して支えていただきました。今更ですが紙面をお借りしてご報告させていただきます。「ろばの家」のことは私がやるから里親会のことと専念

していい」と送り出してくれた浩之にも感謝します。今年の市議会議員選挙の折り地元候補者の一人が随分昔の某新聞のコピーを国会図書館から手に入れて持って来てくれました。「確かにそれは私です。」と認めましたが少々恥ずかしくて眩しいものでした。

偶然か必然か百人町教会には私たちの先にも後にも里親がいます。二〇一七年石垣島に教会の仲間と笹渕夫妻を訪問した時にこの三組は期せずして初対面しました。その後もそのことで話し合う機会はありませんが振り返ると不思議な気持ちになります。「現在の里親会はどうなのでしょうか」と聞きたい気もしますが遠い昔のこの様です。

さて、養育家庭に終止符を打ち、二〇年勤めた仕事も退職して全く今までと違った生活が始まろうと夢見ていた矢先にコロナ禍と出くわすことになりました。二〇一九年一二月に礼拝で証詞の順番が私に巡ってきました。この時は「百人町教会の礼拝に出席するのはこれが最後になる」という覚悟でした。歩行器で移動することもしんどくなっていました。

「五〇周年記念礼拝にも参加できて思い残すことはない」という思いでした。その後三年間一度も礼拝に出席しなくても何のお咎めも無く、年に一回くらいの会員日誌や会報ろば

の原稿依頼があったときは、苦痛の様でもありますが「教会と繋がっている」という喜びの様なひと時を感じることができました。それで十分だったのです。ある時は、吹矢の大会に参加していたところに聖書研究会のメンバーのMさんから電話が入りました。「突然Zoomに参加しなくなったけど何かあったの？」とすっかり心配をかけてしまいました。救助隊に声をかけられたようでホッと安どした気持ちになりました。

二〇二三年になり、ウイズコロナがやってきてようやく新しい日常が取り戻せてきました。礼拝も録音、ズームから進化し、ハイブリット形式（対面とズーム）となりました。更に事情で参加が困難な会員には巡回も試みられています。百人町教会で昨年度発足した全員参加の「未来委員会」に今年も私は幹事を務めさせていただいています。百人町教会五一年の歴史の内五分の四年在籍の私は今年初めて教会総会の議長を務めさせていただきました。世話人選出の選挙ではズーム参加者は一票を投じオンライン投票を体験しました。外国にいても「在外選挙人名簿」により被選挙権も持てる日が来るかもしれません。苦しきならない程度に今後も学びつつ進化について行きたいと思います。

「まいにちハングル講座」事始め

石田 美智代

二〇二三年四月三日にNHKラジオ講座「まいにちハングル講座」の新シリーズが始まりました。九月までの半年間、講師を務めます。百人町教会関係者の皆さまもラジオ講座を聞いて感想を送ってください、本当に励まされ、感謝しています。

コロナ前の最後の高田馬場での礼拝で、私は証詞をしました。「ろば」二二五号にその内容を書いた通り、私と百人町教会の繋がりのきっかけが「韓国語」であり、私という人間を形成する大部分の要素が「韓国語」です。

それにも関わらず、私はもう一〇年近く韓国に行っていないません。私の韓国語をアップデイトしてくれているのは韓国ドラマと韓国映画です。今回の講座には私の「ドラマ愛」の全てを注ぎ込みました。注いだものの、残念ながら溢れてしまった分もあるので「全て」は反映されていません。

NHKから最初に連絡があったのは昨年九月でした。正直、ラジオ講座をほぼ聞いたこともなく、NHKで好きなように仕事ができるとも思えなかったもので、依頼があったのは夢のように嬉しい一方で、不安でした。でも昨今の「韓ドラブーム」のお陰で、「ドラマの

聞き取り」の提案は歓迎され、一〇月に二〇回分の学習内容を提出し、一月に録音テスト撮り、一二月から本格的な収録が始まりました。

仕事の流れとしては、まず講座テキストの原稿を書き、「検閲」を受けてから、放送に使う台本を作成します。収録は日曜日に一週間分（一五分×五回）を行います。台本は、収録までに三回は読んで、読みやすいように手を加えます。一回読むのに二時間×三回で六時間。テキスト原稿と台本は、それぞれ一回分を書くのに平均二時間かかります。テキスト一週間分に一〇時間、台本一週間分に一〇時間かかる計算です。一カ月分の収録が終わると、テキストの初校が上がると、八〇ページ分の校正をします。これが月に一回、平均六時間かかります。

最初の二カ月は、仕事の流れが分からず、苦労しましたが、仕事にかかる時間の見当がついてからは、自分で作ったスケジュール通りに判を押したような毎日を過ごしています。

原稿の「検閲」は、例えば「韓国」はOKだけれど「韓国語」はNG。「海賊団」も強盗事件のあおりでNG。「身分証」は「本人確認証明書」に、変更というものです。これらは当該単語を使わないように設定を変更して対

応しました。また「不治の病」や「交通事故で死亡」という表現に対して「当事者が心を痛める」という注意を受けました。これは「ドラマ素材なのだから仕方ない」と拒絶してみたら、その後何も言つてきませんでした。「麻薬捜査」も「麻薬」が引つ掛かったらしいのですが、担当者が「麻薬使用」でなく「捜査」なのでいいじゃないかと交渉してくれたという報告を受けました。例文や練習問題にBTSなどのグループ名を入れたところ、「当該メンバーが不祥事を起こした時に困る」という理由で削除、変更を強いられました。歌詞によく出てくる八文字を、ちよつと節をつけて読んだら、即「著作権申請！」と大騒ぎに。こういう不自由さは、「あとでネタとして笑話にしよう」と割り切ることにしました。

一番のストレスは「上が反対するだろう」「検聴（放送前の確認）で何か言われる」という「嗚呼、忖度」です。仕事の進め方について意見すると「それは出版の方の責任」「それは録音する側の責任」という「嗚呼、官僚的責任回避」。そして「放送の言い回しとテキストの表現の一致」「用語等の前例踏襲」など、最初に言ってくればいいことを「この時点で言う？」という…以下省略。講座が終わりましたら、ゆつくり愚痴を聞いてください。

美鈴さんに会う

雨宮 道子

ろばの編集委員に「美鈴さんに会いに行きませんか」と誘われ「行きます!」とすぐ返事をした。私はずっと美鈴さんに会いたかったのだ。あのやさしい笑顔を見たいとずっと願っていたのだ。

ユウキ君が生まれた時、お祝いに阿蘇牧師や買牧師たちと数人で大きなロバのぬいぐるみを持って上田家を訪問した。上田家はやさしい、あたたかな雰囲気の家だった。赤ちゃんとユウキ君は今二一歳だという。どんな成長を遂げただろう。倅嗣さんはどんな日常を送っているのだろう。聞きたいことは山ほどあった。

過去のろばを読み、上田夫妻の歩みをたどってみた。美鈴さんは福岡県生まれで三人姉妹の真ん中。校則の厳しい女子高を卒業し、看護学校へ入学した。忙しい仕事の悩みの中で聖書の「神は真実な方です。試練と共にそれに耐えられるよう逃れる道も備えてくださいます。」(コリントの信徒への手紙Ⅰ一〇章一三節)という言葉がキリスト教に出会うきっかけとなる。

倅嗣さんは福岡県生まれで一七歳の時初めて教会の礼拝に参加したそう。二年後名古屋に住むことになって教会へ通いだすと共に誘われて被差別部落へ入るようになり学習会に参加した。そこで出会った男性の言葉が部落問題に取り組む契機となる。教会には毎週参加していたものの、説教の言葉が観念的で自然に足が遠のいていったという。いろいろあつて福井に戻りいろんな職を経験して船橋へ。教会へ行きたいと思っていた矢先、職場

に近い早稲田奉仕園でたまたま百人町教会が部落問題の集会をやっていたことを知ったのが百人町にきたきつ



に近いうち、職場

けだったそう。百人町に出会うまで八つの教会を回り、どの教会でも誰とも話さずそつと去ったとのこと。一九九一年御殿場であった蚕室中央教会との合同修養会で二人一緒に阿蘇牧師から受洗された。私もその場にいた。このところ教会に顔を出してくれることは少なかったが忘れられない人たちだった。倅嗣さんはバスの運転手でつい先ごろ退職された。

そして山谷の炊き出しボランティアをされていたこともろばに載っている。

真夏日になった五月一七日、東西線の東陽町駅で買牧師、小島さんと共に美鈴さんを待っていた。倅嗣さんも一緒だと思っていたら現れたのは美鈴さんだけ。倅嗣さんは人の何十倍もの恥ずかしがり屋なのだそう。ちよつと残念だった。久しぶりに会う美鈴さんの笑顔はそのままがちよつとほっそりしたかな。

開店早々のファミレスに一一時に入り、出たのは三時。一番話したのは美鈴さん、会えなかった十数年を感じさせなかった。美鈴さんはこんなに語る人だったのだ。「今、どんなことをしているの?」と尋ねると、「外には出ないでテレビを見ることが多い。二人で見るともあるし別々に見ることも。この地球にずっと住めるようにする為どうしたらよいか考えている。特に二酸化炭素をこれ以上増やさないため身近なところから工夫していきたい。」その為に必要な国家試験を受けようと思ったが挫折したとのこと。(美鈴さん、がんばれ!)仕事に行くユウキ君がアレルギー体質の為お弁当作りに気を遣うようだ。倅嗣さんは現役時代から夜中に二時間程ジョギングを続けているとのこと。今度は仲良し家族に教会で会えたらいいなあ。

図書紹介

『何人にも悪意を抱かず エイブラハム・リンカン伝』ステイブ・B・オーツ著

高島 敦子訳・新評論

前回の図書紹介ではリンカンが大統領に当選する五章までを紹介した。今回は大統領当選が確定した日の翌日の記者会見（一八六〇年一月七日）から凶弾に倒れるまで（一八六五年四月一日）―その様子は一章で詳細に、そして劇的に描かれる―を報告する。

リンカンが大統領に就任した一か月後、南北戦争が勃発した。そしてこの内戦が終結するのは一八六五年四月九日である。リンカンは在任期間中（一期目の四年間と再選後の五ヶ月）のほぼすべてをこの内戦の対応に費やしたことになる。本書はこの国家の危機的な状態と格闘するリンカンの様子を、多様な人間関係、南部連合軍との戦いの推移を軸として描いている。それぞれ簡単にみていきたい。

彼を支える政治家の筆頭として登場するのが国務長官ウィリアム・W・スワードだ。当初両者の関係は波乱含みだった。リンカンとは第一期大統領選挙で共和党候補として争ったライバル同士だった。リンカンに請われて政権に入閣してから彼は、自分の方が新大統領より才能がある政治家で、政権と政府そのものを支配してやろう」という自信をみせていた。そして、実際にリンカンを操ろうとする。しかし、リンカンは追い込まれるほど手ごわい存在であることを知り、「行政能力と

精力はめったにない資質だ。大統領は我々の中で最高の存在だ」と妻あての手紙で言わしめるまでになった。

リンカンと妻メアリーとの間には四人の息子がいたが、長男のロバート以外は皆幼くして亡くなってしまう。その喪失は夫妻に大きな悲しみをもたらした。特にメアリーは心の安定を失うまでになった。三男ウィリーが一二歳で亡くなった時には交霊術に頼るようになった。また、長男ロバートが入隊を希望した時は、その意思を尊重するとともに戦争指導者の息子だからこそ入隊すべきと考えるリンカンの意見にメアリーは激しく反対した。

内戦勃発した当初ワシントンでは「九十日もすれば戦争は終わりそうだ」と人々は話していた。正規軍の北軍は二千万の兵隊を擁しているのに対し、反乱軍は六百万の兵隊で戦っていた。しかし最初の半年間北軍は一度も勝利していない。その後も戦いは一進一退だった。その一つの理由は、奴隷が南部において社会に広く深く根付いたものであったからではないか。つまり黒人を奴隷として使役する生活様式で得られる実生活上の便益は黒人と白人は平等ではないという価値観をうむ。南軍の強さは、この価値観と生活様式を変えることへの抵抗だったのではないか。現代社会でも生活様式に根差す価値観の相違が深い分断をもたらしている。米国では議事堂襲撃という事態までうんだ。リンカンの格闘から今私たちが学ぶことは多くある。（空閑 厚樹）

ろばのせなか

四月から漸く高田馬場での対面礼拝が再開し、九日は四年ぶりに子供たちと共にイースター礼拝を行うことができた。その時空閑夫妻のお子さんにロバのぬいぐるみをプレゼントした。これは百人町教会の伝統であり雨宮さんが上田さんの訪問から思い出してくれた、実に一二年ぶりの出来事だった。二歳の道生君はとても気に入ってその後皆で新宿御苑に遠足に行った時もずっと離さず持っていたほどだ。御苑はお花見ですごい人出だったが、以前のように持ち寄りの料理を回し、初めて会う子供たちがすぐ仲よく遊ぶ姿を見て満ち足りたひとときを過ごすことができた。

一六日は礼拝の時間に第四回目の未来委員会としてコロナ禍での礼拝の振り返りをした。録音、ズーム、巡回、そして現在のハイブリッド礼拝と工夫を重ねてきた。不具合が起きることもあるが、できないことを嘆くより高齡化が進む中でハイブリッドにより自宅と会場にいる会員が共に礼拝を守ることに感謝したいの思いが強い。これらは賈牧師の力によるところが大きい、今誰でもできるマニュアルを作成中とのこと。課題と情報を皆で共有し解決していきたくと願っている。今年度の編集委員は、泉谷五十鈴、榎本征子、小池恵子、小島悦子、新谷照子、そして昨年からの現役の若手、石田美智代、坂真理子各氏に加わってくれている。賈牧師がこの三年間一人で発送をして下さり感謝です。（小島悦子）